
ひとつ、落ちた

怠枕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとつ、落ちた

【Nコード】

N3850Z

【作者名】

怠枕

【あらすじ】

トリップ小説。文才がないのは元からです。

私の持つてる小説サイトに乗せようかなとか考えています

落ちたのは

ぼたり、

花瓶の中の水から、入れすぎた水が、一つだけ、零れた気がした。

零れた水は

どこか悲しそうで、

だけど嬉しそうで、

それでいて、何故か苦しそうだった。

深夜に、目が覚めた。

普段ならどってことなく2度寝するのだが、今日は、何故か寝てはならない気がした。

いつもなら、このような直感など信じずに二度寝を決め込もうと思うのだが、

いつも以上に気になるそれに、最早眠れまいと苦笑する。

私は欠伸を噛み殺し、ベッドから体を起こすと、水でも飲もうと思いい、台所へと足を進めた。

台所には未だ洗われていない皿が山積みになっていた。多分、お母さんの仕業だ。

お母さんはよく家事を貯め込む。茶碗から洗濯物、掃除に食事など、兎に角貯めこむ。

「（とりあえず茶碗ぐらいは洗っとけよ）」

そう心の中で悪態を吐いたのはここに居る私だけの秘密だ。

ぐちゃぐちゃな水場に多少の不快感を憶えつつ、棚に並んだガラスのコップに手をかける。

コップの中に水を入れようと蛇口を回せば、水独特の透明感溢れる音が、静かな台所に広がる。

ある程度コップに水を入れて、蛇口を締める。

キュ、という音が聞こえ、しっかりと蛇口が閉まったことを確認す

ると、歩きながら水を飲む。

座ってるよりも、歩いていた方が楽なのだ。

そして、一回机の上にコップを置こうかなと思い、椅子に腰かけようとしたとき、反動で水が零れた。

ぽちゃん、

零れ落ちた水の音が耳に残って、頭の中で反響する。
強い眩暈に襲われて、私は倒れた。

ガチャんと、ガラスの割れる音が聞こえた。

これが、

始まり

た一つ、これだけ。

たっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3850z/>

ひとつ、落ちた

2011年12月13日00時58分発行